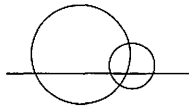


〔若手研究者発表会〕

〔論文〕



書院生のフルンボイル調査を中心に

愛知大学東亜同文書院大学記念センター 暁 敏

Ⅰ. はじめに

東亜同文書院の学生（以下書院生）は、20世紀初頭から半世紀近く、中国において大規模な調査を実施した。その調査範囲がほぼ中国全土に及んでおり、数多くの貴重な資料を残している。これらの資料は、言うまでもなく近代中国の社会経済の研究に大いに有益である。

その中で、書院生が現在の中国内蒙古自治区東北部に位置するフルンボイル（呼倫貝爾）地方において数回の調査を実施している。同地域は、ロシア、中国の二大勢力に挟まれた地域で、歴史上中国、ロシア（ソ連）、および日本が抗争を繰り返す舞台となった。さらに、1939年に同地域においては、現在の日本とモンゴルとの外交関係の中で、避けて通れない出来事「ノモンハン事件」が起きている。従来、政治・軍事上において、各政権に重要視されてきた地域である。

こうした地理的地域的特性をもつフルンボイルは、明治時代から日本側の注意を引く地域であった。書院生が同地域において調査を実施する前の段階から、書院生以外の日本人もこの地域で多くの調査を行なっている。その調査の成果として、数多くの調査資料が残されている。これらをまとめた研究には、吉田順一の「日本人によるフルンボイル地方の調査—おもに畜産調査について—」¹がある。これ以外に、フルンボイル地域を含む内モンゴルにおいて書院生が実施した調査などをま

とめた研究には、森久男、ウルジトクトフの「東亜同文書院の内モンゴル調査旅行」²がある。

筆者は『オープン・リサーチ・センター年報』第2号と第3号にて、「書院生のフルンボイルにおける調査旅行」³と「書院生によるフルンボイルに関する調査報告書」⁴の題で、フルンボイルにおける書院生の調査旅行誌およびその調査報告書を取り上げ、書院生の調査などについて検討してみた。

本稿では、上記の二つの研究を総合して、加筆しながら『東亜同文書院大旅行誌』（オンデマンド版）⁵の関係各巻と書院生が調査旅行を実施した後に作成した調査報告書を取り上げて、書院生の調査旅行のいくつかの特徴などを提示してみたい。

Ⅱ. 書院生によるフルンボイルの調査旅行

「東亜同文書院大旅行誌」を見る限り、書院生がフルンボイル地域で最も早く調査を実施したのは、1925年に実施した第22期生の「北満及國境調査班」⁶によるものである。その調査の具体的な道順は、上海—青島—済南—北京—大連—吉林—ハルビン—同江—大黒河—愛琿—チチハル—満洲里—ハイラル—平壤である。

フルンボイルについて、書院生は主にハイラルと満洲里の両市の周辺を見学した。まず、鉄道を使って満洲里まで行き、在満洲里日本領事館を訪ね、現地事情の聞き取りを行なった。次に、農商



務省から派遣された志水氏に案内され、満洲里市で日本人が経営する試験農園と国境付近を見学した。次の日の朝、満洲里からハイラルに向かい、ハイラルでハイラル公園と洗毛場を見学した。今回の調査旅行は、フルンボイルでの滞在時間が短かったため、記述として少なかった。

しかし、上記の案内人である志水氏は、志水語氏だったかもしれない。同氏は、1925年前後、『満蒙』などの雑誌でいくつかのフルンボイルに関する研究論文を発表している⁷。各論文の著者名のところにおいては「満洲里—志水語」と書かれている。年代と志水氏の滞在場所などをあわせて考えると上記の案内人志水氏は志水語氏であることが推定できよう。仮に本当に同一人物であれば、志水氏は当時のフルンボイルの事情に詳しく、書院生が彼の話を通して詳細な現地事情と情報を得ることができたと考えられる。しかし、報告書においては、フルンボイルに関する記述は見られなかった。

1931年、第28期生の「露支國境遊歴班」⁸は、鉄道で満洲里に入り、そこからハイラルに戻った。ハイラルから馬車で草原に行き、モンゴル人の生活を見た。「大旅行誌」において、「中東鉄道事件」⁹後の満洲里とハイラルの町の悲惨な状況について触れ、「フルンボイルの独立」¹⁰についても記述している。さらに、草原まで同行したブリヤート・モンゴル人との会話が記録されている。

一方、同じく第28期生の「黒龍江省遊歴班」¹¹は、先にハイラルで下車し、そこから満洲里に向かうルートを選んだ。彼らはハイラルに着いた後、「昭和盛」という雑貨店を営む日本人島田氏に世話になった。次の日に一行は島田氏とブリヤート・モンゴル人夫婦に案内され、馬車で草原へ向かった。翌日にハイラルから満洲里へ移動した。一行は満洲里の在満洲里日本領事館で「露支國境遊歴班」のメンバーと合流した。のちに、両班は、領事館に勤める書院の先輩福間氏¹²に、満洲里駐在武官上田大尉と満洲里領事館警察署長を

紹介され、満洲里の現地事情について聞き取りを行なった。同グループの旅行誌において、上記の「露支國境遊歴班」と同じように上記中東鉄道事件後のハイラルと満洲里の町の様子について触れている。また、ハイラル市の商業状況やフルンボイルの種族についても記しており、満洲里での聞き取りの内容および同市の当時の状況などについて相当詳しく紹介している。また、旅行誌の記述を通して、「中東鉄道事件」後と「満洲事変」前のフルンボイル地域の状況を知ることができる。

1932年になると、書院生の第29期生の第2班¹³と第6班¹⁴の2グループがフルンボイルを訪れている。第2班と第6班の道順は同じく、先に満洲里に到着し、在満洲里日本領事館を訪ね、書院の先輩の山崎氏¹⁵と福間氏に会った。山崎氏の紹介で、在満洲里特務機関の小原氏と国境監視隊の宇野隊長を訪問し、現地および外モンゴルの事情を尋ねた。このうち、ハイラルに向かい、山崎氏の紹介でフルンボイル蒙古政庁の顧問を務める猪之口氏を訪ね、現地事情を伺った。その後、第2班はハイラルを離れ、ハイラルの西南に位置するガンジュールスム（甘珠爾廟）、將軍廟およびさらに南のハロンアルシャン（モンゴル語の「温泉」の意味）に向かって出発した。

一方、第6班は、ハイラルに残り、ハイラル警備隊の守島警備隊長と面会し、モンゴル兵の訓練を見学した。また、前述の「昭和盛」の島田氏を訪ね、現地の経済事情を伺った。両班の旅行誌において、フルンボイルの政治や経済などについて触れており、満洲里の国境付近の事情についても詳しく記述し、当時、満洲事変後の「ソ満」国境の事情等を理解するのに参考となるものである。

今回の調査をもとに作成した報告書は、『第26回支那調査報告書』、『第3巻』の「呼倫貝爾事情」の題として手書き原稿27枚の量でまとめられた。その内容の構成は、「呼倫貝爾事情」、「行政組織の有様」、「住民の有様」、「人口密度及び其分布状」²¹、「主要都市」、「呼倫貝爾の牧畜業につい

て、「生活状態」、「蒙古犬」、「道路と交通」、「蒙古〇〇〇指導者の傾向」と、十の部分からなる。

その後1933年になると、第30期生の「海拉爾調査班」¹⁶は、ハイラルに着いた後、北上してフルンボイルの三河地方を訪ねた後、そこから南下してハイラルに戻って満洲里を向かい、さらに、満洲里からハイラルに戻り、ハイラルに2週間ほど滞在した後、南のガンジュルスムとハロンアルシャンに出かけていった。ハイラルから満洲里に向かう途中、同班のト部義賢と松見慶三郎の両氏は、石炭で有名なダライノールの町を訪ねた。

今回の調査旅行において、「海拉爾調査班」は書院生で初めてフルンボイルの北部に位置し、当時フルンボイルにおいて唯一の農耕地帯で、白系ロシア人が多く住む三河地方に足を踏み入れた。また、同調査班は書院生で最も長く（滞在期間が一ヶ月以上）現地に滞在し、ハイラルを拠点にしてフルンボイルの南北を踏破し、その調査範囲が書院生のフルンボイル調査の中で一番広い範囲に及んだ。

旅行誌において、調査した地域の状況について記述しただけではなく、フルンボイルの地理、人口、歴史、行政などについても触れている。

その後、調査の成果として『第27回支那調査報告書』第25巻「三河地方及北部国境地方調査班」の報告書としてまとめられた。同報告書において、三河地方および北部国境地方、南部フルンボイル、満洲里の事情、フルンボイルの畜産について詳細に記述している。同時に、この報告書は書院生による本格的な「フルンボイル調査報告書」として、評価されるべきものである。その具体的な内容については、本稿の後半において取り上げて論じることとする。

1934年、第31期生の「札蘭屯・免渡河・満洲里調査班」¹⁷は、まず、ハイラルに到着し、そこから満洲里に入り、満洲里から再びハイラルに戻り、ハイラルからフルンボイル南部に位置するガンジュルスムとハロンアルシャンに出かけた。

その後、班員の奥田重信が一人でハロンアルシャンから歩いて興安嶺の南麓を横断して索倫を向かった。旅行誌に、ソ連のチタから帰った者から伺ったチタの現地事情、満洲里のモンゴル騎兵団、ガンジュルスムにおける定期市（いち）についての記録が含まれている。今回の調査旅行は行きと帰りも東支鉄道を使った他の調査班と違って、帰りに一人の書院生がハロンアルシャンから直接南のルートでフルンボイルを後にしたのである。その報告書は、『第28回支那調査報告書』、『第25巻』、「札蘭屯・免渡河・満洲里調査班」として残されている。

続いて、1935年、第32期生の「龍江省景星縣・泰康縣調査班」¹⁸は、フルンボイルを通過しただけなのか、あるいは他の何かの理由で旅行誌においてフルンボイルについての記述が見られなかった。

III. 旅行誌からみた書院生によるフルンボイル調査の特徴

こうしてフルンボイル地域に全8コースの調査旅行を実施した書院生が残した記録は、当時の現地情報を把握する意味で貴重であることは言うまでもない。これらのフルンボイル地域で実施した全8コースの調査旅行の記録を総合して、書院生によるフルンボイル調査の特徴をまとめることができる。以下において、書院生によるフルンボイルにおける調査旅行のいくつかの特徴を整理してみる。

第一に、鉄道を有効に利用したこと。フルンボイルの東西を貫くような東支鉄道が存在したため、書院生は比較的奥地であるフルンボイルでの調査旅行がある程度安易にできたと言える。書院生のフルンボイルに入るルートとしては、ほとんど東支鉄道を使い、ハイラルあるいは満洲里に到着している。フルンボイルから帰途につく場合も、第31期生の「札蘭屯・免渡河・満洲里調査班」を除いて、ほとんど東支鉄道を使っている。また、



東支鉄道線に存在するハイラルと満洲里の両市を拠点に馬車や車を利用して踏査旅行を実施したのである。

第二に、フルンボイルにおいて、書院独自の人的ネットワークが存在していた。書院生によるフルンボイル調査の始まりは1925年からである。実際には、本格的に毎年フルンボイルに出かけていくようになったのは1931年から始まった。1931年に満洲事変が勃発し、その後満州国が建国され、フルンボイル地域に満州国を構成する興安北省が設置された。そのため、日本人が当局に便宜を与えられ、フルンボイル地域に簡単に入ることができたことが考えられる。

しかしながら、学生が国境地域に出かけて自由に調査することがそれほど簡単なことではなかったと考えられる。そこで、現地に存在するのは書院独自の人的ネットワークである。前述したように、書院卒業生の山崎誠一郎領事と福間徹外務省職員が満洲里に勤務しており、彼らは書院生の調査旅行にさまざまな便宜を与えた。このようにして、書院生のフルンボイル調査が無事かつスムーズにできたと言える。また、このことから書院卒業生間の深いつながりをうかがい知ることができる。

第三に、書院生は、フルンボイルに到着後、まず現地の日本の諸機関あるいは日本人から情報を収集し、それから自分たちの踏査旅行を実施したのである。書院生は、フルンボイルに到着後、単に領事館など機関を通じて現地情報を手に入れるだけでなく、現地の日本人の様々な話を聞き、さらに調査のための情報や資料を充実化した。これらを踏まえて、現地で自分達が実際に見たあるいは確認したものを記している。さらに、フルンボイルの奥地まで出かけ、現地の人々（モンゴル人）とも色々な形で接触し、そこから得た情報をも記録している。

例えば、1934年、第31期生の「札蘭屯・免渡河・満洲里調査班」の旅行記の「脅威す可き蘇

聯のスパイ網」において、以下のような当時の満洲里でのソ連諜報活動についての記述がみられる。

「日本の特務機関の某軍曹が満洲里の特務機関勤務となつて三月の五日に來満し、三月の十日に所用があつて蘇聯領事館を訪問したら故意か偶然か既に同軍曹の寫真が机上に置かれて在り而も金齒の本数迄調査してあつたと云ふのである」

この記述を見る限り、なぜ学生である書院生がこのような情報を得ることができたのかという素朴な疑問が浮かぶ。この疑問を解くには、上で述べたように、書院生が現地に到着後、東亜同文書院の独自の人的ネットワークを通して、あるいは、現地の日本機関を訪問して情報収集をおこなっていたことがヒントを与えてくれる。

第四に、調査範囲が次第に拡大していったことである。書院生のフルンボイル調査は、最初のハイラルと満洲里の周辺における調査から、フルンボイル南部のハロンアルシャン、北部の三河地方まで拡大していった。

具体的には、1925年の第22期生による調査は、満洲里とハイラルの近辺にとどまった。1931年の第28期生による調査は、満洲里とハイラルの近辺から草原へと踏破調査範囲を伸ばした。1932年の第29期生の調査は、フルンボイルの最南端であるハロンアルシャンまで行った。1933年の第30期生による調査は、南のハロンアルシャンにとどまらず、さらに、北の三河地方まで調査範囲を拡大していった。こうして、調査範囲の拡大によって、調査が深化され、記録内容も次第に充実化されていったのである。

最後にもう一つだけ付け加えるならば、書院生の調査地は国境付近に集中している点である。もちろん、フルンボイル地域全体が国境地域ではあるが、その中で、書院生が足を踏み入れた地方は、ほとんど国境に隣接している地域である。たとえば、満洲里は中口国境都市である。ハロンアルシャン周辺は中蒙国境に隣接している。三河地方

は中口国境に位置している。しかし残念ながら、現段階においてこの点についての具体的な理由は不明である。

ここまで、主に、書院生の旅行記を中心に、その調査旅行のいくつかの特徴を提示してみた。これらの旅行記とは別に、調査報告書においてはさらに興味深い点がいくつ存在する。以下において、調査報告書を取り上げて議論していきたい。

IV. 書院生のフルンボイル調査報告書 ——「海拉爾調査班」による調査報告書について

書院生の調査の中で、満州国が建国されて初めてフルンボイルにおいて調査を実施したのは第30期生の「海拉爾調査班」である。さらに、この「海拉爾調査班」は、上でも述べたように書院生で初めてフルンボイルの南北を踏破し、同地域において唯一の農耕地帯であり、白系ロシア人が多く住む三河地方において詳細な調査を行なった。また、同調査班は書院生の中で、フルンボイルで最も長く滞在し、フルンボイルの南北を踏破し、その調査範囲が書院生のフルンボイル調査の中でも一番広い範囲に及んだ。

その後、調査の成果として『第27回支那調査報告書』第25巻「三河地方及北部国境地方調査班」の報告書としてまとめられた。同報告書において、三河地方及び北部国境地方、南部フルンボイル、満洲里の事情およびフルンボイルの畜産について記述している。同時に、この報告書は書院生による本格的な「フルンボイル調査報告書」としての価値が極めて高いと言える。

上記から見ると、フルンボイルにおける書院生による調査の中で、滞在期間と調査範囲から見ても、「海拉爾調査班」による調査が一番全面的であるため、ここでその調査報告書¹⁹を取り上げて具体的にその内容などについて検討してみる。

その報告書の具体的な構成は、

- 「第1編 三河地方及北部国境地方」
(手書き原稿 100 枚)

- 「第2編 南部呼倫貝爾の概説」
(手書き原稿 26 枚)

- 「第3編 呼倫貝爾に於ける畜産調査」
(手書き原稿 30 枚)

- 「第4編 満州里概説」
(手書き原稿 10 枚)

- 「第5編 海拉爾に於けるトルコタタルに就いて」
(手書き原稿 5 枚)

と、5部構成からなる。

同報告書の内容構成から見ると、全体で手書き原稿 170 枚程度であるが、第1編の「三河地方及北部国境地方」の部分が約全体の半分以上の分量を占めている。

その章立ては、「第1章 興安省北分省（旧呼倫貝爾）三河地方」、「第2章 興安省北分省（旧呼倫貝爾）北部国境地方」の2つの章によって構成されている。

第1章の「興安省北分省（旧呼倫貝爾）三河地方」の内容構成は以下の通りである。

- 第1節 地勢
第2節 人口
第3節 交通
第4節 産業
第5節 商業及び金融
第6節 風俗及び民俗
第7節 文化施設
第8節 三河地方の警備状態
第9節 三河地方の将来

全体が九つの節によって構成されているが、第2章の「興安省北分省（旧呼倫貝爾）北部国境地方」の節の構成は、上記の第1章と同様である。

ここで、第1章の内容を具体的に取り上げて、いくつか興味深い点について確認してみたい。

まず、調査を実施する人員構成のことである。今回のフルンボイル調査の人員構成については、

- 「視察調査参加分署員名
高波騎兵第老旅団長閣下
星騎兵連隊長閣下及小川副官殿

護衛兵、下士官以下十名
海拉爾特務機関ヨリ一名、同協和会ヨリ一
名、通訳一名
同憲兵分隊ヨリ二名、同文書院海拉爾班四
名、他二
乗用自動車二輛及トラック二輛

との記録が見られる。すなわち、書院生は日本の軍、警察、諜報機関である特務機関、さらに協和会などと一緒に調査を実施したことが確認できる。なおかつ、憲兵隊など兵隊の護衛のもと調査を行なったことがわかる。

次に第4節の「産業」の項目について確認してみると、中には「農業」、「牧畜業」、「林業」、「工業」、「鉱産業」などの内容が含まれており、とりわけ「牧畜業」について相当詳細な「部落別の牛・馬・羊の頭数表」の記録がある。さらに、その調査の信憑性を高めるために、第一資料としては「ダラガツェンカ²⁰警察署調査資料」、第二資料としては書院生の海拉爾班員の調査資料、第三資料としては部落付近の住民の所有概数として推算したものという3つの資料を利用し、三河地方の正確な牛・馬・羊の頭数を示そうとした。そこで、一つ興味深いことは、書院生がダラガツェンカ警察署の調査した資料を自由に使えたという点である。

また、最後の第9節においては、三河地方の将来について「アドバイス」なり「提言」なりの記述が見られる。その一部の内容は次のようなものである。

「日満両国〇〇此地〇〇満州国の王道主義〇
〇烏刺爾²²方面へと延長〇〇基礎〇〇作〇
〇である」。

すなわち、書院生はフルンボイルでの現地調査を踏まえ、最終的に国境地帯である三河地方の日本にとっての重要性を強調している。

これらのような報告書に含まれる具体的な内容を確認すると、書院生によるフルンボイルに関する調査報告書は、完成度の高い報告書であったと

認めざるを得ない。これを可能にしたのは、①書院生がフルンボイルに到着した後に現地の日本の諸機関（警察および特務機関など）から情報を収集できたこと②これらの資料を自由に利用できたことである。このことが精度の高い報告書の作成につながったのではないかと考えられる。

以上、書院生の「海拉爾調査班」によるフルンボイルでの調査旅行と彼らによって作成された報告書について具体的に確認してきた。したがって、書院生の調査旅行の「性格」、あるいはその「特殊性」の一端を提示することができた。

しかし、「海拉爾調査班」によるフルンボイルの調査に対していくつかの素朴な疑問が残る。以下、そのいくつかの疑問についてまとめておきたい。

第一に、なぜ日本の軍、警察、諜報機関などと一緒に調査を実施した点。言い換えれば、単なる「調査旅行」なのにどうしてこれらの機関が同行しなければならなかったのかということである。

第二に、資料および情報収集の問題。

第三に、調査の時期と意義に関する疑問。

第一の「なぜ日本の軍、警察、諜報機関などと一緒に調査を実施した点」については、残念ながら現段階においてその経緯などについて説明できない。

第二の「資料および情報収集の問題」については、書院生は軍、警察関係・特務機関などからの情報収集を行なったと考えられる。たとえば、前述したように三河地方の牧畜業の家畜頭数表を作成にあたり、書院生は「ダラガツェンカ警察署調査資料」を活用していた。このことが当時書院の「存在の特殊性」の一側面を見ることができる。

というのは、筆者はこれまでフルンボイルに関する日本語の報告書などを丹念に収集してきた。この時期の報告書や出版物とえば、だいたいマル秘あるいは極秘になっており、「普通の学生」では、なかなか見られないものが多い。このことから、「書院生」だから日本の軍、諜報機関から

情報を収集できたのではないかなと考えられる。

そして、第三の「調査の時期と意義に関する疑問」ではあるが、三河地方の特殊性は、まず国境地帯で、同時に白系ロシア人の居住地域でもあり、そしてフルンボイルの唯一の農耕地帯でもある。すなわち、当時、三河地方は農耕地帯であるため、その後の満蒙開拓団の入植予備地の性格をもつ。実際には、この三河地方に本格的に満蒙開拓団が入植し始めたのは、1936年からのことである²³。このことと関連付けて言えば、この1933年の時点でおこなった書院生による調査は、ある種の「予備調査」の性格をもつ。

管見の限り、書院生による三河地方での調査は、比較的早い段階の調査であり、その参考価値はかなり高かったと言える。要するに、早い段階で実施した書院生による調査およびその後作成した調査報告書、いわゆる調査の成果が、どういうふうにかに他の機関などに利用されたのかについては不明だが、他機関の調査に参考となる部分が多かったのではないかと考えられる。

これらを総合してみると、書院生のフルンボイル地域あるいは三河地方で実施した調査については、いくつかの疑問が残されたが、返ってこれらの疑問がある意味で書院生の調査旅行の「性格」あるいはその「特殊性」の一端を説明しているのではなかろうか。

V. おわりに

本稿では、書院生がフルンボイル地域でおこなった調査旅行について検討してきた。旅行記と調査報告書をあわせて確認しながら、その調査のいくつかの特徴および疑問点を提示してみた。その中で、旅行記に記載している内容は、書院生の感想などがメインで、それを確認すると若い学生たちが現地で楽しく調査したことがわかる。しかし、調査旅行後に作成した調査報告書を確認すると、書院生の記述が大体当時の日本の大きな方針と「同調」していたことが伝わってくる。いわば、

国のための調査であったという性格をもつものである。

これまで、書院生の調査報告書を活用した研究は、それほど盛んではなかった。その理由としては、資料の公開の問題と、手書き原稿であるため読み取り困難の問題が存在していると考えられる。

実際には、調査報告書を活用しながら研究を進めていくと、当時の当該地域の地域像はもちろんのこと、それとは別に、本稿で提示したようないくつかの書院生による調査の特徴が浮かんでくる。今後においては、これらの作業を中心に進め、より総合的に書院生の調査を検証していきたい。

注

- 1 吉田順一「日本人によるフルンボイル地方の調査—おもに畜産調査について—」(早稲田大学大学院文学研究科『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊、1999年)。
- 2 森久男、ウルジトクトフ「東亜同文書院の内蒙古調査旅行」(愛知大学国際問題研究所『国際問題研究所紀要』第136号、2010年)。
- 3 拙稿「書院生のフルンボイルにおける調査旅行」(愛知大学東亜同文書院大学記念センター『オープン・リサーチ・センター年報』2号、2008年) pp. 279-284。
- 4 拙稿「書院生によるフルンボイルに関する調査報告書について」(愛知大学東亜同文書院大学記念センター『オープン・リサーチ・センター年報』3号、2009年) pp. 363-366。
- 5 東亜同文書院編『東亜同文書院大旅行誌』(愛知大学オンデマンド版)雄松堂書店、2006年。
- 6 北満及國境調査班「アムールの悲歌」(東亜同文書院『乗雲騎月』1926年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 112-168)。
- 7 たとえば、志水語「呼倫貝爾鹽湖事情」(大連満蒙文化協会『満蒙』1925年9月号)、「呼倫貝爾タルバガン市況」(同『満蒙』1925年11月号)、「満洲里に於ける薬品類状況」(同『満蒙』1926年6月号)、「呼倫貝爾羊毛市況及満洲里獸腸相場」(哈爾濱商品陳列館『露時時報』1927年9月号)などがある。
- 8 露支國境遊歴班「アムールの流れ」(東亜同文書院『千山萬里』1932年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 2-47)。
- 9 1929年7月、東北当局によるソ連の「赤化防止」と中東鉄道の権益回収をめぐる、ソ連との間に軍事衝突にま



- で発展した「中東鉄道事件」。
- 10 1928年6月に起きた張作霖爆殺事件によって東北地方が動揺した際、ソ連および外モンゴルの援助の下、フルンボイル青年党による武装蜂起が起り、フルンボイルの独立自治を求める事件。
 - 11 黒龍江省遊歴班「東支線を行く」(東亜同文書院『千山萬里』1932年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 538-578)。
 - 12 福間徹、東亜同文書院第22期生。福岡県出身で、書院を卒業後、外務省に入り、中国各地で勤務。
 - 13 第二班「草原を思ふ」(東亜同文書院『北斗之光』1933年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 155-170)。
 - 14 第六班「蘇・満の國境に立ち」(東亜同文書院『北斗之光』1933年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 173-193)。
 - 15 山崎誠一郎、東亜同文書院第1期生。高知県出身で、書院を卒業後、チチハル副領事、張家口領事、満洲里領事、芝罘領事を歴任した。この時に、在満洲里日本領事館の領事を務めていた。
 - 16 海拉爾調査班「黃塵行」(東亜同文書院『亜細亜の礎』1934年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 424-440)。
 - 17 札蘭屯・免渡河・満洲里調査班「白樺の興安嶺を越えて」(東亜同文書院『出處征雁』1935年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 569-603)。
 - 18 龍江省景星縣・泰康縣調査班「北窓に面する二人」(東亜同文書院『翔陽譜』1936年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 423-445)。
 - 19 全体の分量としては手書き原稿170枚。
 - 20 ダラガツェンカは三河地方の中心地である。
 - 21 手書き原稿であるため、「○○」の部分は読み取れなかった部分である。以下同じ。
 - 22 ウラルのこと。
 - 23 森久男「満州国興安北省三河地方の満蒙開拓団」(日本現代中国学会『現代中国』第71号)140～141頁。